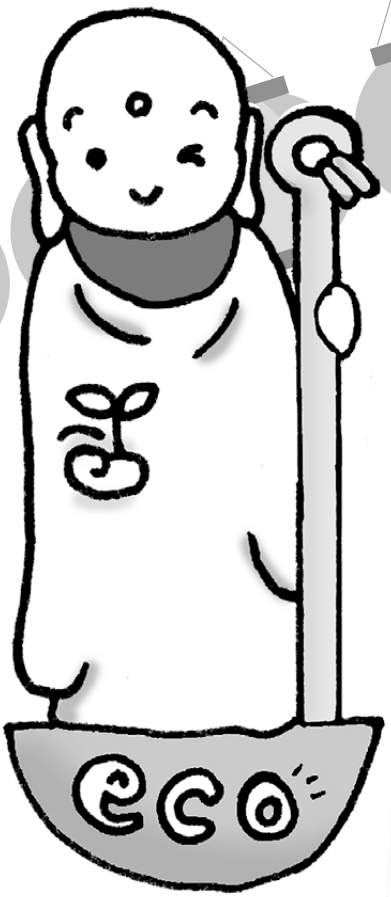
みどりのニュースレター

12
2010
No.211

市民の発信で持続可能な社会をつくる

特集：ひろがる つながる 深化する
エコ地蔵盆に集まる地域の力



特定非営利活動法人
環境市民

¥200
収益の一部は環境市民の活動資金として使わせていただきます。なお、会員には毎月無料配布しています。

このニュースレターはボランティアの手で折られ発送しています。

21世紀 地球を、地域を、生活を、持続可能な豊かさに

http://www.kankyoshimin.org/

Twitterやってます！
アカウントは kankyoshimin です。

みどりのニュースレター

No.211 2010年12月号

編集員が行く！ 02

マウイ島の自然が教えてくれたこと

特集：ひろがる つながる 深化する エコ地蔵盆に集まる地域の力 03-07

行事案内 08

COP10 がもっとおもしろくなる 今こそ知りたい 生物多様性ワンフレーズ 最終回 09-11

COP10 での成果　何が残り何が始まるのか

とれたて！　環境市民 12-13

自分の道は自分で作る 道普請人の活動から国際協力のあり方をみる／国民の幸せを思う国 ブータンの調査報告会

読者交流コーナー **みどりのかわらばん** 14

1/ 環境市民 15

今まで思っていたボランティアとは、大きく違っていた。主体的に創り出しているのがおもしろいと思った。／村田 諒平さん

次号予告 みどりのニュースレター No.212 2011年1月号 現在編集中！

特集：脱グリーンウォッシュ（案）

“エコ”をうたう商品の CM が増えてきました。しかし、中には、一部しか行っていない取り組みを全体で行っているように見せたり、環境負荷を大幅に削減するかのように見せかけているケースがあります。これらはグリーンウォッシュとよばれます。グリーンコンシューマーの視点から、CM を見るポイントを考えます。

編集員が行く！

編集部のアンテナにかかった選りすぐりの
エコ情報を伝えます！

No.18 マウイ島の自然が教えてくれたこと

空と、海と、虹と、山を感じたい。そう思って、遅めの夏休みに向かった先は、ハワイのマウイ島でした。ホノルルのあるオアフ島から飛行機でわずか 30 分の距離。ハワイが火山だと一目でわかる赤土の山肌の島や、偏西風の影響で年間を通して雨が多いエリアは、ジャングルのように緑で覆われた様子がくっきりと輪郭を浮かび上がらせているのが見えました。高揚感とともに降り立ったマウイ島は、どこへ行っても、あるがままの自然を感じることのできる、豊かな島でした。

マウイの人々と挨拶を交わす時、必ず自然の話題が出てきます。「今朝の虹を見た?」「あのビーチは本当に素敵」「今日は山の頂上は雲に覆われてしまってたわね」。そして、彼らは、家族や身近な人たちを愛し、多くを求めずに生きる達人でした。彼らは、「持続可能な社会を!」と思って暮らしている訳ではないと思います。美しい自然のないマウイなど考えられない、自然に生かされているんだ、というシンプルな想いが常に心の中にあるようです。

そう思ったエピソードがあります。両手では簡単に持てない量の買い物をした時でも、「バッグは持っている?」と聞かれました。エコバッグを差し出すと、「ワンダフル!」と言って、バッグに物を詰めてくれます。「バッグはいらないわ」と言うと、とびっきりの笑顔で「ナイスね!」と言ってくれます。どこでお買い物をしても、こんなやり取りのある買い物は、とても気分がいいです。さらに、地元のスーパーマーケットでは、写真のようなプラスチックバッグのリサイクルボックスを発見しました。使えなくなってしまったものでも、捨てずにリサイクルに回せる仕組みがありました。

自然も人も素晴らしいマウイに、私は一瞬で恋に落ちました。と同時に、日本にも、ちゃんと素晴らしい自然があることを思い出しました。四季折々の自然を大切にする気持ち、またその自然を誇りに思う気持ちが、買い物袋を断るというような日常の行動のきっかけに繋がったらいいなと思います。空気の澄んだこの季節、冬支度を始める山へ、静けさが戻った海辺へ行ってみませんか。日本の良さを再発見するに違いありません。

（文／ニュースレター編集部　駒 ゆき香）

特集：ひろがる　つながる　深化する
エコ地蔵盆に集まる地域の力

環境市民が2006年から主に京都市内の町内と取り組んでいる「エコ地蔵盆」。子どもの健やかな成長を願う伝統行事の地蔵盆に「環境」の視点を取り入れることを提案したこのプロジェクトでは、今年もあらたなアイデアが町内からたくさん生まれました。

まずは、8月21、22日に実施した今年のレポートからどうぞ！

大宮薬師山西町・東町（京都市北区）

「面白い！」が共感に　三年目のエコ地蔵盆

大宮薬師山西町・東町（以下、薬師山町）が初めてエコ地蔵盆に取り組んだのは2007年。リユース容器を使ってごみを減らしたり、5から6年生をリーダーにした町内スタンプラリーを実施し、「面白かった」という印象が町内の人たちに残りました。それから一年間あいたものの、昨年に続き、今年は三回目のエコ地蔵盆に取り組みました。

大きな取り組みの一つは、ごみ減量。薬師山町を含む大宮学区では、学区でリユース容器を所有し、希望する町内に貸し出しをしています。薬師山町は、今年の地蔵盆でももちろん使っています。会場には、お茶とお水のサーバーが用意され、缶やペットボトルは見あたりません。カップ洗浄用の水タンクも用意され、使用後はそれぞれが洗って返していました。

子どもたちの夕食に用意されたハヤシライスは、レンタルショップで借りたお鍋を、知り合いの料理屋に持ち込んで作ってもらったもの。リユース皿と持ってきたマイカップ、マイスプーンで食べる子どもたち。100人近い子どもたちへの配膳は、町内の中学生たちが手伝い、役員さんの負担も減りました。食後のお皿は、仕事で木材を扱う役員さんから提供してもらったおがくずで油分をぬぐい、洗浄の際の洗剤や水の使用量を少なくしました。洗浄担当の役員さんたちからも「手も汚れないし、洗うのも簡単です」と評判でした。

左の机の上からビール、お茶、水の各サーバーが並び、右端にはカップ洗浄用のタンクを配置しています。

おやつでは、冊子の事例を参考に綿菓子の軸をグリッシーニ※にしたり、アイスはコーンに乗せるタイプのものにしたりと、おいしくて、ごみの出ない工夫をしたところ、子どもたちも大喜びで、ごみも三袋のみ。「これだけならうちで捨てとくわ」と一人の役員さんが持ち帰りました。

ハヤシライスの配膳は、町内の中学生が手伝ってくれました。

こうした取り組みに加えて、今年の担当者は「広い町内なので、子どもたちが会場と自宅を行き来する回数をできるだけ減らして、ずっと会場で遊んでいられるようにしたかった」とのこと。そこで「シャボン玉ショー」を実施し、子どもたちが自由に遊べるシャボン玉キットを準備したところ、普段では作れない大きなシャボン玉が作れるので、子どもたちに大好評。空いた時間にみんなでにぎやかに遊びました。

今年の担当者さんは、「この町内ではじめて参加した地蔵盆が2007年、その時に『面白い』と思ったので、今年も取り組みました」と実施の動機を話してくれました。毎年役員が変わる町内会では、新しい試みが引き継がれていくのが難しいといわれるなか、「この取り組みいいな」という共感が次の実施を促すことにつながっています。

ハヤシライスに使用したリユース皿は、おがくずで油分をふき取ります。

※グリッシーニ……小麦を原料にスティック状にしたイタリアのパン

石薬師町（京都市上京区）
フェアトレード※のおやつと体操で私も社会も元気に！

「自分たちが買うものが、社会的な支援につながる商品があるならそれを選びたいと思った」と町内の役員さん。今年のおやつはフェアトレード※で、食品添加物を使用しないクッキーやドライフルーツのセットです。日頃、スナック菓子を食べることが多い子どもたちに、地蔵盆という年に一度の機会には、いつもと違うおやつを提供して、親にも「こんなお菓子もあるんだ」と知ってほしいという思いもありました。未就学児が多く、例年、かき氷やアイスクリームを食べきれない子どもがいたので、冷たいおやつを冷凍みかんに変えたところ、小さい子どもたちも食べきれ、容器ごみも減りました。

また、町内にある体操教室から「町内の人たち向けに教室を開きたいが、地蔵盆のプログラムに入れてもらえないか」と申し出を受けたことがきっかけとなり、大人向け、親子向けの体操教室を実施しました。体操教室の担当者は、「町内のために自分たちには何ができるかと考え、周辺のごみ拾いをしようかとも思ったのですが、体操教室という自分たちの特徴を活かして、町内の人たちの健康づくりに協力することに意味があると考え、地蔵盆に提案しました」とのこと。ちょうど、町内からもお願いをしようとしていたところで、両者の思いが一致して実現に。大人にも子どもにも大人気の体操教室でした。

親子の体操教室。

子どもも大人も、わいわいテントに集まってきます。

さらに役員さんの、「子どもも大人も、町内の人たちが安心して集まれる場を作りたい」という思いから、屋外の集会所にテントを設置、日陰をつくりました。そのお陰で、それぞれが持ち寄った絵本やおもちゃで遊ぶ子どもたち、そばで談笑する親たちが長時間、集会所にいるという風景が生まれました。こうした工夫のなかで、数年続けられていても、単に形式的になっていたことや、一部の人に負担が大きくなっていることはやめました。行事や地域として大切なことや必要なことは何かを見極めて、やめるもの、続けるものを判断した結果が今年のエコ地蔵盆でした。

※フェアトレード……貿易において、生産者の不利益や取引における不平等を解消し、生産地の環境を将来にわたって保全する貿易のこと。

黒谷前地蔵会（京都市左京区）
はじめてのエコ地蔵盆はマイ食器から

毎年同じような内容の地蔵盆になっていたこともあり、新聞で見つけたエコ地蔵盆の冊子を参考に、地蔵盆にエコの視点を取り入れてみようと提案した役員さん。お母さんたちでいろんなアイデアを出し合いました。まず、毎年恒例のそうめん流しでは、マイ食器マイお箸を呼びかけました。「自分のお椀とお箸もってきーや」とお母さんのかけ声がかかり、そうめん流しがスタート。そうめんを流す竹筒の支えは、木工店を営む役員さんの手作り台。子どもたちが食べ終わると、流し役のおかあさんとバトンタッチ、途中参加のお父さんは、子どもからマイお椀をバトンタッチされるなど、親子の楽しい交流

がありました。冷たいお茶はサーバーで用意し、飲みたい分だけをコップに注いだり、大皿にもられたおかずを欲しい分だけ取り分けたりと、食べものの無駄をなくす工夫をしました。

子どもの遊びも今年はひと工夫。輪投げの景品は、家から持ち寄ったおもちゃにしました。子どもたちは順番に気になるおもちゃに狙いをさだめます。ごみが出ないことに加えて、使わないものをお隣さん同士で交換できるというメリットがつまった取り組みになりました。

夜の親睦会では、年配のおばあさんから「来年もこんな地蔵盆にしてね」という感謝の声が。環境問題に関心のある役員さんの思いから提案され、子どもを想うお母さんたちが主体的に実施したエコ地蔵盆。「来年はさらに工夫をこらしたエコ地蔵盆にしたいです」と役員さん。この町内の役員任期は二年で、一年ごとに交代します。エコ地蔵盆の視点や取り組みが毎年、役員さんの間で共有され、次の年に引き継がれていく、そんな期待がふくらんだ今年の地蔵盆でした。

マイ食器を持ってそうめん流しを楽しみます。

大津町
（京都市中京区）

みんなでいっしょに発電体験

会場前に立て掛けられた、人目を引く大きな太陽光パネル。太陽光エネルギーで動くミッキーマウスのおもちゃの周りには子どもたちが集まっています。初めてのエコ地蔵盆となる今年のテーマは「エコと自主防災」。「町内の子どもと大人との交流の場をつくりたい」、そんな町内会長さんの思いと、エコ地蔵盆の冊子で、京都府地球温暖化防止活動推進センター[注1]が太陽光パネルや発電体験キットを貸し出していることを知ったことがきっかけとなり、今回の実施に至りました。

午後、風の通る室内で、「手回し発電体験キット」と「LED 電球・豆電球比較キット」を使って、みんなで電気を起こす遊びをしました。電球が点灯する様子を見たいと子どもも大人も夢中になってハンドルを回します。LED と豆電球の電気エネルギー量が比較できるキットの体験では、「白熱電球に比べ、LED の方が効率が良いから、ハンドルを軽く回すだけで電気がつくんや」と、大人が子どもに得意気に話しかけます。人力で電気を起こす体験を通して、普段使っている電気器具がどれだけ多くの電気エネルギーを消費しているか学べる場となりました。

午前・午後二度のおやつは、冊子を参考に食品添加物の少ない商品を選んで提供。子どもたちにはクッキー、ブラウニーやおせんべい、大人向けには阿闍梨餅本舗・満月 阿闍梨餅（あじゃりもち）やおかきといった地域性や国産素材にこだわったものを選び、環境に配慮したおやつを知るきっかけになりました。

随所に環境への配慮を散りばめて取り組んだ今年の地蔵盆。多くの子どもたちが集まり、にぎやかな時間となりました。

豆電球の点灯に向けてハンドルを回す子どもたち。

注1　京都府地球温暖化防止活動推進センター……NPO 法人　京都地球温暖化防止府民会議が運営。京都府内の温暖化防止に向けた取り組みを行っている。
URL：http://www.kcfca.or.jp/index.html

（取材・文／エコ地蔵盆プロジェクトチーム　岩崎 恵美子、内田 香奈、北野 博史、弓削 美樹）

エコ地蔵盆で　深まる 広がる 地域づくり

（文／エコ地蔵盆プロジェクトチーム　内田 香奈）

●引き継がれる「エコ地蔵盆」

今年のエコ地蔵盆の特徴の一つは、継続して取り組む町内が登場したことです。その一つが三ページでも紹介した北区大宮薬師山西町・東町でした。薬師山町では、ごみ減量やおやつへの配慮等、ほとんどの取り組みが引き継がれ、新たな工夫も取り入れられています。また、前年にマイカップ等、容器の持参を呼び掛けたところ、今年も引き継がれてごみ減量につながるなど、部分的に継続されている町内もあります。昨年実施した町内に近隣の町内からも問い合わせがあるなど、少しずつエコ地蔵盆が地域に浸透してきているようでもあります。

多くの町内では、役員は毎年交代します。しかし、そのなかで「この取り組みはよかったから続けよう」「今年もやろう」と新しい役員から声が出て継続されるなど、前年の取り組みが共感を得ている様子がわかります。

一方で、新しくエコ地蔵盆に取り組む町内も現れています。近年の地球環境問題が大きく取り上げられる中、子どもも含めて地域の人たちに環境のことを考えてもらう機会が必要だと感じている人が地域にもたくさんいます。「でも具体的にはどうやって伝えたらいいのだろう」という迷いに、エコ地蔵盆の取り組みをヒントとして、取り組んだという町内もありました。中京区大津町の事例からは、同じ町内会の住民発の情報は、他の住民にもより身近なこととして受け止められる様子がうかがえます。

●多くの人を巻き込むための工夫

取材を行うなかでは、環境という視点だけでなく、こうした行事が本来、地域づくりにつながるものであること、それゆえに時代に合わせて少しずつ変わっていることも感じました。たとえば、例年２日間行われていた地蔵盆を一日だけにする町内は増えています。「会社勤めの人が増え、地域のことにかかわれる人が少なくなって仕方なく」というマイナスの理由で語られることが多いのですが、そうばかりとも言えません。新たな仲間を巻き込むための手段となる場合もあるのです。町内によっては、お地蔵さんを地蔵盆の二日間だけ、その年の町内会長さんのお宅に飾る風習が残っています。しかし、マンションが増え、町内会長さんがマンション住まいという年も現れるようになりました。そこで、ある町内は、「より多くの人が参加しやすく、役員としての役割も果たせて、みんなで地域を盛り立てられるように」という意図で、お地蔵さんを屋外の広場に飾って地蔵盆を一日だけにする、という新しい試みをした町内もありました。ここでは、大切なことは「二日間行うこと」ではなく、「地蔵盆で住民が参加し交流すること」だと判断されたのです。目的と手段をきちんと分けて考えられた結果でもあると思います。

そば打ち体験

●地域のために自分にできることは何か

また、地蔵盆での役割を役員だけのものにせず、住民や事業者が、自ら役割を引き受けることを申し出て地蔵盆に協力する例もみられました。

2009 年に「子どもたちに食品添加物の入っていないおやつを食べてほしい」という思いから、役員が自らの趣味をいかして子どもたちとパン作りをした町内では、今年は「そば打ちができる」と手を挙げた住民のもとで、子どもたちはそば打ちを体験しました。その住民は、「昨年のパン作りをみて、自分の趣味がこうした行事にも役立つことを知り、それなら自分でもできるかもと思った」と話してくれました。事業者の協力は上京区石薬師町の事例のとおりです。また、草津市内の町内会では町内会役員とは別に、10代～70代の有志で「地蔵盆実行委員会」をたちあげ、役員と協力しながら行事に取り組んでいます。

●市民が育つエコ地蔵盆

こうした地域から見える動きは、市民活動で語られることと同じです。「自分ができることはなにか」「どうやって仲間を増やすか」、と考えをめぐらせ「自ら率先して」取り組む。エコ地蔵盆は、行事の環境負荷を下げる取り組みですが、環境という視点を手掛かりに、自分たちの地域を見つめなおす効果も持っています。自分たちの地域をよくするために、どのような人たちが、どのようにかかわり、どんなコミュニケーションが図られたか。エコ地蔵盆をきっかけに新しい関係性やアイデアが生まれて実行される過程は、自分たちの手で自分たちの地域をつくる市民が育つ過程でもあるのです。

●これからの取り組みについて

ある町内の方からこんな感想をいただきました。「冊子に紹介された事例を見るうちに、『あれはやってはいけない、これはやってはいけない』という壁がなくなって、『あれもやってみよう、これもやってみよう』という気持ちになった」こうした声にこたえる意味でも、町内の事例を冊子やウェブサイトを通じて発信していきます。

また、地域の商店に、おやつや行事で使う日用品等、ごみ減量につながるものや食品添加物が使用されていない商品が購入しやすくなるよう、働きかけていきたいと考えています。

■エコ地蔵盆とは？

毎年８月に行われる京都の伝統行事「地蔵盆」に環境の視点を取り入れることを提案したもの。行事を通じて環境負荷の小さい商品を紹介・普及すること、それが日常生活にも取り入れられることをめざしている。2006 年一町内でスタートし、2010 年は約 20 町内で実施した。

京都では地蔵盆で取り組まれているが、基本的な考え方は、他の地域でも町内会単位や学区のお祭り等、比較的規模の小さなお祭りに取り入れることができる。取り組み事例等を紹介した冊子を発行している（お知らせ参照）

■エコ地蔵盆での提案

エコ地蔵盆では右記のことを提案しています。一度にすべてを取り組むことが難しくても、取り入れやすいものから少しずつ取り組んでいくとよいでしょう。

おやつ
- ●化学合成された添加物が入っていないものを選ぶ
- ●地域のお店のものを買う
- ●ごみが少ないものを選ぶ

あそび・プレゼント
- ●キャラクターものでないこと
- ●電池、電気を使わないものを提供する
- ●仲間同士のコミュニケーションを作りだす
- ●町内の大人の知恵や特技を生かす

家庭の景品・おさがり
- ●資源を大切にしたものを選ぶ
- ●化学物質が少ないものを選ぶ
- ●地元や近郊の生産者、メーカーを応援するものを選ぶ
- ●生産地の環境や生産者の暮らしを守るものを選ぶ

ごみを減らす
- ●缶や小型ペットボトルの利用をやめる
- ●マイ食器を利用する
- ●リユース食器を利用する

お知らせとお礼

●冊子「やってみよう！エコ地蔵盆 Vol.2」ダウンロードのお知らせ

冊子 Vol.1（2009 年 3 月作成）につづき、Vol.2（2010 年 6 月作成）も環境市民のウェブサイトからダウンロードができるようになりました。Vol.1 では、エコ地蔵盆の取り組み方法やコツ、Vol.2 では、環境を楽しく学ぶ工夫を紹介しています。町内の取り組み事例がたくさんつまった内容です。ぜひ、2 冊あわせてご覧ください。

▼冊子のダウンロードはこちらから

環境市民トップページ＞活動・実績のご案内＞豊かなライフスタイルを創造する＞エコ地蔵盆
http://www.kankyoshimin.org/modules/activity/index.php?content_id=14

●プロジェクトご支援のお礼

エコ地蔵盆プロジェクトに対して、みなさんから右記のご支援をいただきました。ありがとうございました。プロジェクトの活動資金として、大切に使わせていただきます。これからも、みなさんからのご支援をよろしくお願い申し上げます。

◎近畿ろうきん NPO アワード助成金

「やってみよう！エコ地蔵盆 Vol.2」を作成しました。

◎エコポイントの寄付

・家電エコポイント 40,606 円
（2010 年 2 月 19 日から 2010 年 8 月 19 日の期間）
・住宅エコポイント 93 円
（2010 年 4 月 21 日から 2010 年 8 月 19 日の期間）

省エネ家電や省エネ型住宅の購入で発行されるエコポイント制度。このポイントを環境団体に寄付できる制度があり、環境市民も対象団体になっています。

● 2010 年度、エコ地蔵盆の取り組みが以下の新聞で紹介されました。
・6 月 24 日京都新聞、8 月 3 日朝日新聞、8 月 23 日読売新聞

行事案内 12月

京 環境市民　東 環境市民東海　滋 環境市民滋賀

滋 水鳥観察会

琵琶湖には、冬季水鳥が訪れ、冬の風物詩となっています。膳所公園付近の水辺にも11月後半から12月にかけて、さまざまな水鳥が訪れますので、水鳥の観察会を行います。

＊とき：12月4日(土) 午前9:30から12:00
＊ところ：大津市膳所公園（京阪電車膳所本町下車、湖岸へ徒歩数分）
＊講師：おおつ自然観察の会　＊参加費：100円
＊持ち物：あれば双眼鏡　＊服装：防寒の衣服
＊申込み：滋賀事務所　＊締切：12月3日(金)
＊主催：おおつ自然観察の会・環境市民

京 1Day ボランティアデー

毎月エコな話題をおしゃべりしながら会報誌みどりのニュースレター発送作業をしています。どなたでも参加できます。お気軽におこしください。

＊とき：12月24日(金) 午前11:00から午後7:00頃まで
12月27日(月) 午後2:00から7:00頃まで
＊ところ：環境市民京都事務局
＊備考:予定時間を過ぎて来られる場合は、ご連絡ください。
◎次回発送予定日……1月31日(月) 午後2:00から7:00まで

京 ドイツの環境先進都市からみえた 人もまちも元気になる 持続可能な地域づくり

～野の塾シリーズ　持続可能な地域づくりを知ろう～

環境先進国として知られるドイツ。環境市民では、設立以来、ドイツの自治体やNGOとの交流を続けてきました。2010年9月、ハノーファー、ハム、ハイデルベルク、グリースハイムを訪れ、視察・交流を行なってきました。歩いて楽しいまち並みや商店街、利用しやすい公共交通、エコ住宅団地、自然の力をいかして修復された川……。日本でも実現できるのではないか、と思う事例や施策が数多くありました。ドイツで見た、聞いた、最新情報をみなさんにご紹介し、京都に、日本にどう活かしていけるのか、ディスカッションします。

＊とき：2011年1月18日(火) 午後6:30から8:50
＊ところ：ハートピア京都 第5会議室
＊参加費：（主催、共催団体の会員）800円
（非会員）500円
＊申込み：お名前、連絡先電話番号、主催・共催団体のいずれかの会員かどうかを電話、FAX、メールにて、環境市民京都事務局までご連絡ください。
＊定員：50人(先着順)　＊主催：環境市民
＊共催：NPO法人気候ネットワーク、認定NPO法人きょうとグリーンファンド
＊後援：京エコロジーセンター、京のアジェンダ21フォーラム

プログラム：

○事例紹介 午後6:30から8:15
・枚本 育生（環境市民 代表理事）
・下村 委津子（環境市民 理事）
・内田 香奈（環境市民ボランティア／京都市市民活動総合センター事業コーディネーター）
・有川 真理子（環境市民 事務局）
○ドイツのまちづくり、京都に日本にどう活かすか
午後8:15から8:35
・田浦 健朗さん（NPO法人気候ネットワーク 事務局長）
・大西 啓子さん（認定NPO法人きょうとグリーンファンド 事務局長）
○参加者質問タイム 午後8:35から8:50

野の塾って何？：環境問題や持続可能な地域づくりに役立つ情報をわかりやすく紹介したりディスカッションする講座やワークショップなどを行っています。

行事の申込み･お問い合わせは各事務局まで

京 **環境市民**
TEL.075-211-3521 **FAX.**075-211-3531
IP電話.050-3581-7492 **MAIL.**life@kankyoshimin.org

東 **環境市民東海事務所**
TEL･FAX.052-521-0095 **IP電話.**050-3604-6182
MAIL.tokai@kankyoshimin.org

滋 **環境市民 滋賀事務所**
TEL.077-522-5837 **MAIL.**cefshiga@kankyoshimin.org

新入会員インタビュー

駒井（こまい） 裕子（ゆうこ）さん
（滋賀県在住）10月4日入会

中学では地球温暖化をテーマに卒業論文を書き、大学では植物の系統学を専攻しました。環境問題への関心は昔から強かったんです。でも、自分から動くのは少し苦手で、具体的にエコな行動に移すことはできませんでした。とはいえ、今は環境について「考える」だけじゃ足りない時代。この入会を機に、ぜひ積極的に会の活動をお手伝いしたいです！

ミーティング＊（いずれも京都事務所で行います）

12月 2日（木）ラジオチーム 午後3:00から5:00
12月 6日（月）環境共育SKIPチーム 午後7:00から9:00
12月10日（金）電子かわら版チーム 午後7:00から9:00
12月13日（月）ニュースレター編集部 午後7:00から9:00
12月23日（木・祝） ラジオチーム
時間は未定（お問い合わせください）

新入会／寄付＊（10月1日から10月31日まで）

〈新入会〉伊藤 福重／駒井 裕子／高橋 猛／谷村 美佐子／名古屋 さよ子／渡邊 明子
〈寄付〉東佳広／大谷 恒夫／長崎 純一

\ COP10がもっとおもしろくなる /

今こそ知りたい 生物多様性ワンフレーズ

生物多様性条約第10回締約国会議（CBD-COP10/MOP5:以下COP10）の会期中、NGOが毎日発行する『ECO』というフリーペーパーを翻訳するプロジェクトがあります。そこで、この『ECO』に関連した英語のフレーズを紹介しながら、NGOの視点からCOP10に向けての話題をお届けします。

（文 /「ECO」日本語化プロジェクト コーディネーター
原野 知子）

連載第6回 **最終回**：COP10での成果

何が残り何が始まるのか。

Mother Earth is not for Sale. No to the greed economy. Yes to equity, justice and biodiversity.

母なる地球はお金では買えません。どん欲な経済はいりません。必要なのは、そう、公正と正義と生物多様性です。

……この記事が読まれるのは12月。ちょうど気候変動枠組み条約COP16メキシコ・カンクン会議も始まって、10月のCBD -COP10/MOP5のことなどすでに記憶の彼方かもしれませんが、どうか思い出してください。

COP全体の概要は環境省報道発表資料※にまとめられています。COP期間中、私自身は明け方から午後1時くらいまで『eco』翻訳版の編集作業を自宅で行い、原稿ができあがってから国際会議場へ出かけていたので、会議全体の流れや国際会議場内外でのいろいろなイベントにはほとんど参加できず。この記事では、断片的ながら自分が見聞きし、感じたことを伝えることにします。

10月11日（月）：MOP5 初日

今回のCOP10における3大課題のひとつ、カルタヘナ議定書「責任と修復」条項（9月号第3回参照）についての補足議定書が採択される見通しが立ち、お祝いムードが漂いました。

10月12日（火）：『eco』Vol. 34 issue 1 発行

MOP期間中に『eco』を発行するかどうかぎりぎりまで決まらず、前日になって火・木2回の発行が決まりました。英語版は朝9時に印刷が上がって会議室入口をはじめ、国際会議場会場各所やセキュリティーエリア外の交流ブースなどで配布、翻訳版は午後3時過ぎにやっと印刷、配布することができました。内容はカルタヘナ議定書に関することなのでかなり難解なものもありましたが、翻訳ボランティアのみなさんの協力で非常に質の高いものができました。ドイツNGOのアチェさんの記事“We are all the public”（私たちはみな公衆である）では、バイオセーフティの普及には、適切な情報へのアクセスと公衆の参加がそれを促すこと、科学者も消費者も“公衆”であるという主張が特に印象に残りました。

10月15日（金）：MOP5 最終日

補足議定書は無事採択。MOP5は終始和やかなムードだったと言えます。並行して、午後からCBDアライアンスによるCOP10に向けたNGOガイダンスが、また、国際先住民族フォーラム（IIFB）による戦略会議も始まりました。

10月16日（土）－17日（日）

会場内の参加者も増えてきていよいよCOP本番という雰囲気になってきました。CBDアライアンスによるCSO（市民社会組織＝国・産業界・研究者などを除く市民組織：日本ではNGOとほぼ同義）の開会声明作りなどが、海外と日本のNGOの共同で進められました。

10月18日（月）：COP10 初日『eco』Vol.35 issue 1 発行

「生命はビジネスではない」はこれからの会議に対し、締約国がCBDの理念を忘れないよう訴える記事。そのほか日本のユースのメッセージ、CBD市民ネットのCSO宣言への署名の呼びかけなど、日本人投稿の記事が多く掲載されました。

10月19日（火）：『eco』Vol.35 issue 2 発行

CSOの開会声明、IIFBの開会声明の抜粋、海洋保護区の記事などを掲載。開会声明は初日のプレナリー（総会議）でNGO代表が発表する予定でしたが、各国の開会声明が長引いて時間がなくなったため延期に。この記事の標題「Mother earth ～」の文章はこの声明文の最後の決め言葉です。

NGO戦略会議の様子
COP10開催直前に行われた。世界各地から集まったNGOメンバーが、「Top10 issue for COP10（COP10における10の課題）」などを議論した。

※環境省報道発表www.env.go.jp/press/press.php?serial=13104

BY 2020：2020 年までに
会議場入口で新戦略目標の懸案［2020 年までに］を盛り込むことをアピールする日本ユース“がけっぷちの生物多様性実行委員会”メンバー。

10 月 20 日（水）『eco』Vol.35 issue 3 発行

「地球の持続可能性に向かって」の記事では、国連が設置を発表した「地球の持続可能性に関するハイレベル・パネル」についてのコメントとして、競争から協力へ、個人の利益から社会的利益へ、均一なものから多様なものへ、といった根本的な価値観の転換を訴えています。これを読むまでそのような発表についても知りませんでした。『eco』の情報の幅広さと深さには感服します。上関原発工事に抗議した交流フェアブースでのハンガーストライキの記事も掲載されました。

10 月 22 日（金）『eco』Vol.35 issue 5 発行

この日、会議全体の中間とりまとめのプレナリーにおいて、初日にできなかった CSO からと IIFB からの声明がやっと発表できました。CSO の声明では、この会議を“生物多様性のコペンハーゲン”にしないでほしいと訴え、また、今進行しつつある悲劇として上関での原発開発工事に対する懸念も急遽追加されました。これは、上関の関係者による必死の訴えに市民社会全体が共鳴した結果であり、「温暖化対策に原発を」という安易な議論への警鐘の意味もあります。この後、（この声明との因果関係は不明ですが）現地の工事は一時中断されました。

10 月 25 日（月）『eco』Vol.35 issue 6 発行

COP10 とコペンハーゲンをもじって、“Cop10hagen”（コップテンハーゲン）とし、気候変動削減策 REDD とグリーン経済にも懸念を表しています。また別の記事では、バイオ燃料のコンタクトグループにおける共同議長（カナダ・コロンビア）の横暴ぶりを告発しています。ちなみに COP はプレナリーと 2 つの作業部会（WG Ⅰ・WG Ⅱ）で議論が行われますが、COP10 ではさらにイシュー（課題）ごとに「コンタクトグループ」「フレンズ・オブ・チェア会議」「非公式会合（ICG）」など、最多で合計 8 つの小委員会も並行して開催されていました。

さてこの日、CBD アライアンスを中心とした CSO は、COP10 で生物多様性の損失に最も貢献する最悪国として EU とカナダに“ドードー賞”を授与しました。この評価は ABS コンタクトグループでの議定書の拘束力を弱めようとする態度など、さまざまな議題での総合評価によるものです。

10 月 27 日（水）『eco』Vol.35 issue 8 発行

CSO はこの日から始まるハイレベルセグメント（閣僚級会合）に合わせて会議進捗状況を項目別に評価し、推進と妨害する国を発表。ちなみに日本の名前は出てきません。ホスト国日本は、いい意味でも悪い意味でも、ここまでのところあまり存在感はなかったということでしょうか。

10 月 28 日（木）：『eco』休刊

閉会まであと 2 日なのに、ABS 議定書も戦略計画もいまだに多くの［ ］ブラケットが残ったままで合意点が見えてこないことに、本当に“Cop10hagen”になってしまう……と誰もが不安になってきました。ABS 議定書について、日本政府は CBD 事務局と連携し、議長提案への一本化を始めたようでした。

10 月 29 日（金）：COP10 最終日
『eco』Vol.35 issue 9 発行

CSO は COP10 名誉者リストを発表。日本に対しては“素晴らしいホスト”という言葉と共に、“最も大きな矛盾”として里山イニシアティブを推進する一方で上関や沖縄での開発による里山破壊を指摘しています。パーティー押しかけ屋＝非締約国 USA（見えざる影響大賞もノミネート）など、皮肉もたっぷりです。最後にハイレベルセグメントに対する意見として、気候変動枠組み条約（UNFCCC）では、生態系は取引可能な炭素吸収源となってしまう、工業的でない農業や生態系に配慮した生産を行うことが地球を冷やすことになるとし、再び“母なる地球はお金では買えない”という言葉で締めくくっています。

さてこの日、ABS 議定書に関する議長提案が午前中に各国に非公式に提示され、また、戦略計画を話し合う WG Ⅱでは、午後になってもまだ議論がつづき、ほとんどエイヤッの状態でプレナリーに突入しました。午後 3 時過ぎから始まったプレナリーでは、異論

拍手する人、腕組みをしたままの人
名古屋議定書・愛知ターゲット・資金動員が採択され、スタンディングオベーションする参加者たち。「心からおめでとう」というよりは「ようやく終わった」というのが本音でしょうか。一方で内容に納得できず、さりとて合意を妨げることもできなくて腕組みを解かない人も。

の出そうにない議案が次々採択され、「国連生物多様性の10年」決議（11月号第5回参照）や水田の生物多様性に関する記述を含む「農業生物多様性」決議など、CBD市民ネットからの提案を含むものも無事採択。次回COP11開催地がインドに決定したところで、インド政府主催のレセプションのために一時休憩に。予定より3時間半以上も遅れて午後11時（！）から再開された会議は日付が変わってもつづき（ヨーロッパ時間ではまだ当日ということ？）、午前1時30分、ABS議定書は“名古屋議定書”として、戦略計画は“愛知ターゲット”として採択されました。議長を務める松本環境大臣によって採択の木槌が振り下ろされると長い拍手が続き、その後は各国からのお祝い声明、議長のあいさつ、最後にジョグラフ事務局長のあいさつで夜は更けていきました。

……COP10での最大懸案であったABS議定書、新戦略計画とも採択され、日本は議長国として面目を保ちました。それとともに当然、今後、日本は率先して名古屋議定書を批准し、国内法を整備しなくてはなりません。愛知ターゲットにしても同様で、生物多様性国家戦略に具体的な目標を書き入れなくてはいけないし、名前を冠した愛知県も（COP3後の京都のように）県として目標を策定し、国内政策をリードするべきでしょう。それにはもちろん、市民の参加が必要です。国内のどの地域でも市民の参加による生物多様性地域ターゲットの策定を実施し、市民と行政・企業が一体となって進めることで、はじめて生物多様性が浸透していくのです。私たち日本の市民社会がどれだけがんばるか、議長国の責任が継続するこれからの2年間が特に重要であり、インドで開催される2012年のCOP11で胸を張れるようにしたいものです。さらに“国連生物多様性の10年”提案国として、世界をリードする義務もあります。

今回のCOPは目に見える成果があったことで、それればかりが注目されています。しかし私自身は、気候変動枠組み条約UNFCCCが経済問題として取り上げられ、森林も農業も全てがお金の問題として進められていくことに対して、生物多様性条約CBDが歯止めとなる可能性が見えたという印象を受けました。今後、さらに両方の条約に注視するべきでしょう。

ホストNGOのバトン
COP9最終日にドイツのNGOから託されたオブジェは、COP11開催地のインドNGOへと引き継がれた。インド・日本・ドイツのNGO代表が記念写真。

……ECO翻訳プロジェクトをやり遂げるにあたり、翻訳ボランティアの方々からなんの保障もないのに信用してもらい、献身的な協力をいただいたことが何よりありがたいことでした。また、最初はECOの翻訳について特に何の期待もしていないようすであったCBDアライアンスのメンバーが、途中からこの翻訳についてとても感謝してくれるようになったことが、予期していなかった喜びでした（開催国の母国語に翻訳されたのはCOP史上初めてのこと）。想像ですが、市民社会の声を会議場の中だけでなく、外にも伝えることの大切さを認識したのかもしれないと思います。

地球環境保全のためにこれから必要なのは、右肩上がりの経済成長ではなく、市民が“正義”を掲げて声を出すこと―これがCOP10の経験から私が得たメッセージです。

CBD-COP10/MOP5で決議されたこと

■名古屋ークアラルンプール補足議定書

カルタヘナ議定書の「責任と修復」を補完する議定書。輸入された遺伝子組み換え生物（LMO）や遺伝子組み換え作物（GMO）が、生態系へ損害を与えた場合の原状回復や賠償などのルール。

■ ABS名古屋議定書

遺伝資源へのアクセスと利益の衡平な配分（ABS）に関する、法的拘束力のある議定書。遺伝資源だけでなく、その利用に関する伝統的知識も対象に。ただし病原体など、緊急性を要するものは対象外。

■愛知ターゲット（新戦略計画）

生物多様性の損失を食い止めるための新しい目標。2020年までに具体的な行動を起こすこととし、保護区を陸域17％、海域10％を目標とするなど、20の個別目標を定めた。中長期目標として2050年までのビジョンも明示された。

■国連生物多様性の10年

2011年からの10年間を“国連生物多様性の10年”と定めるように、国連総会で採択するように勧告することを決定。そのほか合計47の決議が採択された。

12月23日（木）午後2:00から報告会をします。詳しくはウェブサイトへ。

『eco』の翻訳の他に、CBD Fact Sheets（30個のKey words）を翻訳しましたのでウェブサイトでご覧ください。
eco翻訳版：www.cbdnet.jp/convention/
参考：NACS-J事務局日誌（会議場での様子など）：www.nacsj.or.jp/diary2/

とれたて！環境市民

環境市民の今、そしてこれからの活動をお知らせします

自分の道は自分で作る
道普請人の活動から国際協力のあり方をみる

9月15日、ひと・まち交流館 京都（京都市下京区）にて「土のうで道普請～使える技術を必要な地域へ」というセミナーが開催され25人の参加者がありました。途上国の生活環境は日を増すごとに悪化しています。持続可能な社会をつくるために、国際協力は待ったなしの問題です。しかし、日本の国際協力のやり方には多くの問題が生じています。現地のニーズにあわない技術提供もその問題のひとつです。例えば、コンクリートで作られた道は壊れた時、現地に住む人々自身で修復できません。そこで、現地の人たちでも扱える「土のう」を使って、道の作り方、なおし方を伝えているNPO法人道普請人の理事長の木村亮さんをお招きしてお話を伺いました。本セミナーは、環境市民のラジオチームが、出演された木村さんのお話をより多くの人に聞いてもらいたいと企画しました。

ウガンダの整備道の前で

木村さんは、京都大学の教授でもあり、専門は土木工学で、建築物基礎（建物を建てるための土台）などを研究されています。アフリカの貧困削減に土木技術者として何ができるのかを10年前くらいからテーマとして活動されています。アフリカで研究成果を使ったことは一度もなく、「長年のアフリカ渡航経験から、最新技術や講釈などを振り回しても無用の長物だとわかっていた」と木村さん。また、同じ京都大学の先生に「難しい技術ではなく、簡単な技術でアフリカの人々を幸せにする方法を考えないとだめだよ」と言われ続けてきたこともあって、アフリカの問題をアフリカ人が解決し、貧困削減につなげることをコンセプトとして活動して来られました。土のうによる道作りは、構想5年、検討2年を重ね、その後すぐに実行をしたそうです。

農民自らが行う「土のう」による道なおし

世界の約90％の道が舗装されていないようです。その現状は想像以上に大変で、特に雨の降る地域では、車が通ると未舗装の道が泥田のように掘られて、通れなくなるそうです。道は、たった一か所が通れなくなるだけで、せっかく収穫した農作物を市場に届けられずに腐らせてしまうことなど、生活ができなくなる様子が伝えられました。そこで、道の一部を補修してやれば、そういった問題はすぐに解決するということで、「Links to Market」というコンセプトをかかげて活動はじめられたそうです。「Links to Market」とは、「道を市場につなげよう」という意味です。道は、生活の基盤であり、コミュニケーションのツールであり、なくてはならないものという答えがアフリカの住民のアンケートから得られたそうです。世界中探しても他にこのようなコンセプトをかかげているNPOはないと自慢げに語られました。

土のうでの道作りの特徴がたくさん説明されました。必要資材が、土のう袋と現地調達できる土なので、安い材料で作ることができるそうです。2007年にウガンダの田んぼ3000haの中央道路2.0kmの修復費用は、たった30万円で作られたと解説されました。土のう袋に土を入れ、締め固めるだけで道ができるため、機械も人材の養成期間もいらず、簡単な道作りであり、住民が積極的に道作りに加わる様子の写真が紹介されました。そして、行政が動いてくれるのを待つのではなく、住民が自らの生活改善のために道を作るということも大きな特徴だといいます。

土のうによる道路整備作業を通じて、アフリカの人たちは、はじめ作業は難しいと感じていたが今では簡単だとわかったとか、信用できなかったが今では確かで実現可能な道路整備手段として理解、納得できたなどの感じ方の変化があったそうです。さらには、行政や重機を待つのではなく、自分たちで道路を整備できることに気づいたということも大きな変化だそうです。

「道普請人の活動を世界の各地にいち早く広げて、道をつなげて、農村社会を活性化し、貧困を削減したい。ノーベル平和賞もめざしたい。」とこれからの活動を広めていく構想を熱く語りました。

最後に、質疑応答の時間があり、アフリカ住民の道作りに対する意識などの話がされ、終了しました。簡単な技術で貧困を解決していくという考え方が、もっと広い範囲に広がるといいなと感じました。

講師の中村さんが出演されたラジオ「環境市民のエコまちライフ」はこちらのURLから聞くことができます。（2008年8月4日放送）

http://kankyoshiminradio.seesaa.net/article/104220040.html

（文／ニュースレター編集部　村田 諒平）

国民の幸せを思う国　ブータンの調査報告会

10月19日、ハートピア京都（京都市 左京区）にて「持続可能な社会とは？　ブータンの国づくり・まちづくり調査報告会」というセミナーを開催しました。（後援：財団法人 地域公共人材開発機構、龍谷大学大学院NPO・地方行政研究コース）南アジアに位置する小国家ブータン。経済成長の指標であるGNP（国民総生産）ではなく、国民の幸福（精神的豊かさ、GNH：Gross National Happiness）を国づくりの指標に据え、憲法に持続可能な社会経済開発やヒマラヤの自然保護を明記するなど世界から注目されています。しかし自国の文化を守るため、観光客を制限していることもあり、その実態はあまり知られていません。そこで、本年9月にブータンを訪れ、中央政府の財政政策や地方政策、環境政策などについて調査を行った龍谷大学法学部教授の富野暉一郎先生に、調査結果を報告していただきました。第2部では、国際政治ジャーナリストの今本秀爾さんとともに、ブータンの政策を私たちがどう捉え、環境も、経済・雇用も、社会的公正・福祉も持続可能で豊かな社会をつくるために何を生かせるのかなどについて対談しました。会場には、定員を大きく超える約80人の参加者が入り、インターネット配信用のビデオカメラもあったためか、環境市民のいつものセミナーとは少し違うピリッとした雰囲気でした。

第1部では、富野先生のブータンでの写真を見ながら、調査の様子が紹介されました。氷河の溶けた水が流れる谷や川などの自然、高くそびえ立つ城や民族衣装などの文化、マイクロ水力発電や道路開発などの近代化というようにブータンの今の様子がぎっしり詰まったスライドショーで、実際に旅をしている気分になりました。調査中には、環境教育をする先生を指導する人と話す機会があり、環境教育の中でAwareness（気付いていること）を大切にしており、身近な物と自分と環境との関係性を問いかけることから環境教育が始まると聞いたそうです。調査の結果、予算の援助の額が大きく財政的には自立できていない現状と、水力発電の収入で20年後には財政的にバランスがとれる計画が明らかになりました。他の収入として税収や観光収入もありますが、国内産業が発達していないため、まだまだ小規模だと言います。最低限国民にとって安心して、過ごせるような経済状況であれば、それ以上物もお金もいらないという「ベーシックヒューマンニーズ」を定義しているそうです。そのようなブータンの幸福政策は、貧しいからできると言われていますが、実際は仏教的価値観の影響が色濃く、日本人なら理解して持続可能な社会づくりに活かせる可能性もあるということを示唆されて、第1部は締めくくられました。質問タイムでは、ブータンへのビザ申請や、観光制限について質問があがりました。

第1部　会場には参加者がぎっしり

第2部では、今本さんの質問に対して、富野先生が答えてゆくという形式で、要点を絞って話がすすめられました。はじめにブータンの人たちにとっての価値観、豊かさが質問にあがりました。それは、すべてのことが明らかになった時であり、よく瞑想をすることもその表れだと言います。「ブータンは社会観や仏教のベースの上に、合理主義的な思想（人権・教育・GNH）をうまく調和させていますが、日本はそのあたりが中途半端に思います。その違いはどこにあるのでしょう」という今本さんの質問に対して、「ブータンが事業評価をしっかりしているのは国外からの援助の影響が強いと考えています。だから、その答えは保留します。日本も悲観することなく、頑張る必要があります」と富野先生は答えました。国民投票で国王も罷免できるという法が通ったほど透明性のある民主主義という指摘から、いくつかその要因が述べられました。最後に、富野先生は「ブータンは夢の国のように、安易に報道されていますが、ほんとうに学ぶべきなのは具体的な仕組みや戦略、そして基本的な思想や理念です」としめられました。質問タイムでは、日本の国会議員の世襲制をどうするか、GNHを日本に取り込む難しさなどの質問が飛び交いました。

第2部　左：富野先生　右：今本さん

ブータンから学べるものはまだまだたくさんありそうです。持続可能な社会を築いていく中で、ブータンを例に学ぶべきものを見つける必要があるのかもしれません。　（文／ニュースレター編集部　村田 諒平）

▼このセミナーの様子は、インターネットを通じてご覧になることができます。
ハイライフ研究所
http://www.hilife.or.jp/wordpress/?p=4127

みどりのかわらばん

つながる・ひろげる みどりのわ

読者×読者、
読者×環境市民をつなぐ

NGOの仲間紹介

＊損保ジャパンCSOラーニング制度：（財）損保ジャパン環境財団が実施する、環境分野のCSO（市民社会組織）で、大学生・大学院生にインターンシップを経験してもらう制度。

♣ 今年度、損保ジャパンCSOラーニング制度＊により環境市民でインターンする学生たちを紹介します。

奥村 芙未さん

（立命館大学大学院政策科学研究科博士前期課程1回生）

私がインターン先に環境市民を選んだのは、自治体ー市民協働でつくられる環境まちづくり、環境首都コンテストに関わりたいと思ったからです。6月からこのプロジェクトに関わり、これまでは自治体の環境施策の勉強会や自治体への参加呼びかけを主に行ってきました。インターンを通じ、地域にぴったりな環境まちづくり推進のサポートができるようになりたいと思います。

大西 里奈さん

（奈良女子大学 文学部近代東洋史専攻3回生）

最初に損保ジャパンのCSOラーニング制度を知り、その中の企業や自治体と活動している環境市民に面白味を感じて選びました。
これから首都コンテストの忙しさが本格化しますが、“精一杯”やり遂げたいと思います。
そしてそれが今後のバネとなるよう頑張りたいです。

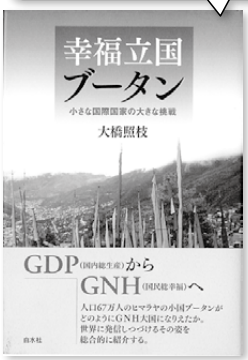
村田 諒平さん

（同志社大学理工学部環境システム学科3回生）

環境のNPOでの活動に興味があったのと、「伝える力」を向上させたいという思いがあったため、充実した広報に携われる環境市民を選びました。ニュースレター編集部と電子かわら版チームに入り、毎月発行するニュースレターの編集や、ウェブサイトの更新、メルマガの配信などの広報活動に携わっています。これから1月まで広報3チームの連携企画を成功させることが目標です。
※村田さんは本誌15ページ「1/環境市民」でも紹介されています。

インフォ@エコ

♣ 環境に関するオススメの本、映画、音楽などをご紹介します。



幸福立国ブータン 小さな国際国家の大きな挑戦

大橋 照枝　著　2010年7月　白水社（1900円＋税）

物質的には裕福とは言えない。先進国と開発途上国という区分では後者に含まれる。しかし国民の97％が「幸福」と答える国ブータン。本書はこの国の実情や政策などについてわかりやすく伝えている。

ブータンは、国づくりの指標をGDP（国内総生産）ではなくGNH（Gross National Happiness= 国民総幸福）とし、すべての政策立案を行なっている。このGNHという概念は、第4代国王ジグメ・シンゲ・ワンチュックが、1976年「GNHはGPNより重要」と発言したことに始まる。2006年、同国王は王位を皇太子に譲ると同時に王制を廃止、立憲議会制民主主義への移行を宣言。2008年には初めての総選挙とともに、言論・思想の自由、選挙権などの基本的人権、民主主義、環境権などを明記した憲法が施行された。

ブータンはGNHを単なる理念にとどめることなく、国づくりの四本柱として経済的自立、環境保護、文化の推進、良き統治を掲げる。さらにそれらを精神面の幸福、人々の健康、教育、文化の多様性、地域の活力、環境の多様性と活力、時間の使い方とバランス、生活水準・所得、良き統治という九つの指標で定量的かつ定性的にデータを収して政策立案に生かしている。

いま、国際的にもGDPに代わる様々な持続可能性指標が研究、開発されているという。ブータンの実践を世界の研究者や国連機関などが注目している。ただし、ブータンの人々が幸福というのは、科学的合理性を重視する西洋的論理ではなく、国教としてのチベット仏教への信仰心が反映した結果であることは事実である。このことを理解した上でなければ、我々外の人間がブータンの幸福度について本当に理解することは難しい。ただ、著者は仏教文化がもたらす助けあいや寛容、中庸、知足少欲などの考えが生きるブータン社会を「ブータンモデル」と呼び、それが人口減少など右肩下がりの日本社会にあって、自治体にも勇気を与えるのではないかと言う。私たちにとって持続可能で豊かな暮らし・社会とはどんなものだろう。年末年始、じっくりと考えてみたい課題である。　（文／風岡 宗人）

SKIPの！エコファイター劇場

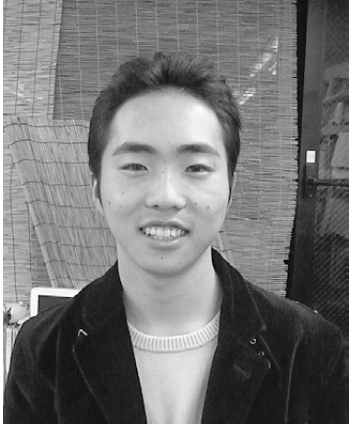
環境共育チームSKIPの環境プログラム「エコファイターショー」をモチーフとしています。　イラスト：かわみん

ご意見・ご感想宛先：メール・FAX・郵送でお送りください　(MAIL)newsletter@kankyoshimin.org (FAX)075-211-3531
(郵送)〒604-0932　京都市中京区寺町通二条下ル 呉波ビル3階NPO法人環境市民 みどりのニュースレター編集部 宛

環境市民

かんきょうしみんぶんのいち

★環境市民の会員を紹介します



no.66 村田 諒平さん

同志社大学理工学部 環境システム学科3回生、同志社エコプロジェクト（DEP）に所属、現在、環境市民でインターン中

今まで思っていたボランティアとは、大きく違っていた。主体的に創り出しているのがおもしろいと思った。

■広報っておもしろい

損保ジャパンで、CSOラーニング制度※というのがあるのを知ったとき、その制度自体がおもしろいと思った。さて、インターン先を選ぶにあたって、まずは環境系のNPOにかかわってみたかった。そして、特定の環境問題だけではなく、様々な環境問題を扱っているという理由で、環境市民を選んだ。自分でもどんな分野に関心があるのか、まだわかっていないから、いろいろ狭めたくはなかった。まちづくりにも興味がある、そういうことが聞けたらいいな、というのもあった。それよりなにより、「広報」がやりたかった。広報で募集していたのが環境市民だった。

今は、主にニュースレターと電子かわら版チームにかかわっている。6か月ほど経ったが、感想としては「おもしろい！」と。確かに、いつも生き生きと楽しそうにやっている。「ここまで主体的にやっているなんてすごい。その一員になれているのも嬉しい」。

締め切り前など、原稿を急いで仕上げないといけないこともある。きついと思ったことはない？と聞くと、「どんなことでも、きついと思うことはある。でも、追い込まれることには慣れているつもり」。

■同志社エコプロジェクト（DEP）

大学の職員と、学生が協力して取り組む、同志社エコプロジェクトでは、昨年、環境学生討論会の企画、運営に関わった。同志社と京都大学、早稲田、慶応の21人の環境活動をしている学生と3か月に及ぶ討論で提言を創り出した。

ゼロからのスタートだったので、一緒に作ってくれた仲間がいなかったらできなかった。みんな同じような悩みを抱えていることもわかった。大変だったが、これが1回目となって、今年2回目の環境学生討論会が開かれ、すでに来年3回目の開催が決まった。「環境問題に対して、学生であっても、ちゃんと取り組む姿勢が作られていくと思う。そのきっかけになれば嬉しい」。

だが、残念なこともある、昨年までは環境に配慮してリユース食器で行っていた学園祭が、今年は大学側の都合で、使い捨ての容器で行われたことだ。「なかなか難しい問題です。でも、来年はぎりぎりまで交渉するつもりでいます。なんでしょうね。面倒なんですかねぇ」と残念そうである。

■伝えるのが上手くなりたい

広報という点では手痛い失敗もあった。「街づくりのプランコンテスト」に、大学の授業での実践をもとに「休耕地を利用した市民自治菜園の提案」を仲間とともに発表した。二位だった。「一位の提案と同じ位、内容的にはすぐれていたと思う。明らかにプレゼンテーションの差を思い知らされた。伝えるには技術がいる」と今も悔しがっている。その経験が今回、環境市民で広報のインターンを希望する動機につながる。

とにかく努力家なのだ。常に反省も怠らない。どんな反抗期を送ったの？という問いに、「自分自身に対して、反抗期を送っていたんです。高校生のときに」と言う、クラブ活動もせず、ひたすら自分を見つけ続けた3年間、そして大学生活。実は今も進路に迷っている。いろんな可能性を秘めた未来に、環境市民での経験はきっと役に立つだろう。「あっ、インターン終わっても、広報は続けますよ。おもしろいですから」。もちろん、こっちもそのつもりである。

（文・写真／ニュースレター編集部　千葉 有紀子）

※14ページ参照

今月のありがとう

目立たないところでも、お力を貸してくださった方々に、感謝をこめて―。

小野 景子／東 広之（五十音順敬称略）

編集後記

自分の町内でエコ地蔵盆を広げたい、そんな思いでエコ地蔵盆プロジェクトメンバーになりました。初めてのエコ地蔵盆の取材では、市内の各町内でいろんな工夫をこらした取り組みを知ることができました。子どもとお年寄りの交流が生まれるエコ地蔵盆にしたい、町内会長をした経験を通じて、自分の町内の課題が見えました。継続は力なり！という言葉のとおり取り組みを継続する、まずはごみ減らしから続けていきたいです。

（エコ地蔵盆プロジェクトチーム　北野 博史）

編集部（五十音順）

有川 真理子　千葉 有紀子
大槻 達郎　内藤 一樹
風岡 宗人　中村 桂祐
久保 友美　村田 諒平
駒 ゆき香
角出 貴彦
田麦 誠

デザイン
藤本 芳一

あなたのエコポイントで 地域のおまつりのエコ化を応援しよう！

～環境市民　エコ地蔵盆プロジェクトへのエコポイント寄付のお願い～

エコポイント対象家電を買ったり、住宅をエコリフォームするともらえる「エコポイント」制度。環境市民もエコポイント寄付対象団体になっています。

みなさんのお手元にある「エコポイント」を、ぜひ環境市民に寄付してください 。

いただいたポイントは 1 ポイント =1 円で換算され、本会が行っている「エコ地蔵盆」の活動資金となります。

ぜひ皆さんからのご支援とご協力をお願いいたします。

環境市民へのエコポイント寄付申請時には、以下の事業者コードが必要です。

【事業者コード】 K138

▼環境活動を行っている団体への寄付について

http://eco-points.jp/EP/use/category06/index.html

▼環境市民へのエコポイント寄付方法

エコポイント交換申請方法は以下のページをご参照ください。

http://eco-points.jp/EP/use/howto.html（家電）

http://jutaku.eco-points.jp/user/item/howto.html（住宅）

ラジオ番組 「環境市民のエコまちライフ」 京都三条ラジオカフェ（79.7MHz）

身近な話題から旬の話題まで環境の視点から情報発信　放送時間：毎週月曜午後 1:00 から 1:15（再放送は火曜朝 7:00 から）

インターネットでの試聴・ダウンロードはこちら→ **URL: http://kankyoshiminradio.seesaa.net/**

環境市民に入会しよう！

環境市民は、多くのボランティアと会員の皆さんの参加によって支えられています。「持続可能で豊かな社会づくり」のために、ぜひ会員になって環境市民の活動を応援してください！

会員特典

□月刊会報誌「みどりのニュースレター」をお届けいたします。
□行事などの参加費を割引させていただきます。
□環境に関する様々な情報を得たり、また質問や相談ができます。

会費

種別	年会費	入会金
個人会員	4,000円	1,000円
ペア会員	6,000円	2,000円
シニア・学生会員	3,000円	ー
ファミリー会員	8,000円	2,000円
助成会員	10,000円	ー
特別助成会員	50,000円	ー
終身会員	一括　80,000 円	
営利法人会員※	1口 50,000 円	50,000円
非営利法人会員※	1口 10,000 円	2,000円

※ 年会費は一口以上

会費の振込み方法

1）郵便振替振込用紙に、住所・氏名・電話番号・会員の種類・送金内容事項をご記入の上、「年会費＋入会金」をご入金ください。（※シニア・学生・助成・特別助成会員は入会金不要）

2）ご入金を確認後、最新のニュースレター、入会記念としてポストカードをお届けします。

寄付をする

住所・氏名・電話番号・寄付金額をご明記の上、下記の振込先へお振り込みください。

会費・寄付のお振込み先

【郵便振替】 口座番号：01020-7-76578
加入者名：環境市民

（発行）**特定非営利活動法人　環境市民**　（代表）枚本 育生　（発行人）堀 孝弘

TEL：075-211-3521　IP 電話：050-3581-7492　FAX：075-211-3531

E-mail：life@kankyoshimin.org　URL：http://www.kankyoshimin.org

〒604-0932 京都市中京区寺町通二条下ル呉波ビル 3 階（月から金午前 10:00 から午後 6:00）

●環境市民 東海事務所

TEL&FAX：052-521-0095　IP 電話：050-3604-6182

E-mail：tokai@kankyoshimin.org　URL：http://www.kankyoshimin.org /tokai/

〒451-0062　名古屋市西区花の木 1-12-12　AOI ビル 4 階

●環境市民 滋賀事務所

TEL：077-522-5837　E-mail：cefshiga@kankyoshimin.org

〒520-0046　大津市長等 2 丁目 9-12　竺 文彦気付

この印刷物は風力発電による自然エネルギーを使用して大豆油インキで印刷しました。印刷：（有）糺書房

環境市民
Citizens Environmental Foundation

本誌の無断複写・複製・転載を禁じます。「環境市民」登録商標 第4809505号